

死生観体験 ―「死即生への旅」― ―尊厳死へのわが思い―

其れは両親の死です。先ず母は大病院で医者者の真剣な延命治療の末亡くなりました。その真剣な努力には感謝しつつも何故か悔いが残りました。

次に父の時はそういう思いにならない様叔母に相談し、神戸六甲山麓のカトリック病院に入れました。禅宗の父はお蔭で大往生しました。当時の二十五年前、その言葉も日本では知られなかったホスピスケアと尊厳死を同時体感しました。日本人特有の固定観念で死は暗く恐ろしいイメージが素晴らしい瞬間に一変、母と父の最期で最高の贈物に大変感謝しています。

其処から私の安心立命への旅が始まりました。満足して死ぬには人生思い残す事無く生きる事だと気付き、五十五歳で今後の人生設計をしました。生涯の起承転結をハッキリさせよう、そこで定年後の転を機にお世話になった社会へ感謝と喜捨でお返し喜びの喜謝期に、次の結は遊行期としました。六十歳退職と同時に尊厳死協会と笑い学会へ入り死と生をライフテーマにしました。尊厳死が出来る様、生を笑いで充実させたいと考えました。

尊厳死協会へ入ると機関誌・講演会から死に対する安心と勇気が湧き、また以前拙稿を載せて頂いた際、ベテラン会員諸兄から含蓄のある具体的なお助言・交流を賜り、今では尊厳死は「大往生」と言う心境になりました。

生き方としては、定年の平成四年は因らざるもバブル崩壊元年に遭遇し、新しい時代の新しい社会創りに諸企業・行政他、N/SPO・社会的企業創りで広く貢献出来又勉強になりました。お陰で望外の価値ある第二現役を体験しました。昨年元旦七十二才の年男を期に仕事を引退し、第四の遊行期に入りました現在、自分で手創り出来る本当の人生を味わっています。

尊厳死はどう生きるかを絶えず考え行動する源泉であり、病氣になっても元氣を与え、思い残す事無く死を迎える希望を運んで呉れます。昨年、関西支部の講演で「笑って大往生」の奥義を戴き、心から喜んでいます。此れからは笑いと尊厳死をじっくり熟成させながら朗笑の与生を自在に味わいたいと願っています。今後のご指導・ご助言をお願い申し上げます。

願わくは花のもとにて春死なん その如月の望月の頃 西行

無一物中無盡蔵 有花有月有樓臺

禅語